

広島方言話者における文末詞「の」と「ん」の獲得

永田 良太¹⁾・伊東 昌子²⁾
(2015年1月5日受理)

A Developmental Study on the Acquisition of Japanese Sentence-Final Particle “no” and “n” in Hiroshima Dialect Speaker

Ryota NAGATA and Masako ITOH

Japanese sentence-final particles express the speaker’s various intellectual and mental attitudes. In this paper, the following points are clarified about the acquisition of Japanese sentence-final particle “no (common language form)” and “n (Hiroshima dialect form)” in Hiroshima dialect speaker.

1. Sentence-final particle “no” is previously acquired rather than “n”.
2. A large number of “n” is used as an interrogative sentence.
3. When “no” and “n” are used as an interrogative sentence, the word forms of the front word differ, respectively.
4. The independent form “n” is acquired after the complex form “n-yo” and “n-ne” are acquired. On the other hand, the complex form “no-yo” and “no-ne” are acquired after the independent form “no” is acquired.

Key words: Hiroshima dialect speaker, sentence-final particle “no”, sentence-final particle “n”, native language acquisition

キーワード：広島方言話者，文末詞「の」，文末詞「ん」，母語の獲得

1. はじめに

日本語の文末詞は話し手（表現者）の様々な知的・心的態度を表し、文を完結させる働きを持つ（藤原1982）。例えば、「このペン、貸して。」と「このペン、貸してね。」という二つの文を比べると、後者では聞き手に対する話し手の親和的な態度が表されている。

このような文末詞を日本語母語話者がどのように獲得するかに関しては、これまでに多くの研究が行われており、様々な文末詞がどのような順序で獲得されるか（大久保1967、藤友1979、小椋・中・山下・村瀬・マユウ1997など）や「よ」、「ね」といった特定の文末詞に着目して、それらの文末詞が持つ様々な発話機能がどのような順序で獲得されるか（横山1992、1997）ということが明らかにされている。

これらの研究においては文末詞の中でも共通語形の

ものが扱われているが、藤原（1982）でも指摘されるように、文末詞には方言形のものも多く存在する。例えば、本研究で対象とする文末詞「の」（「行くの？」）は広島方言では「ん」（「行くん？」）という形をとる。すなわち、広島方言話者は「の」と「ん」という同じ意味を持つ二つの語形を獲得していることになるが、そのような共通語形と方言形の獲得がどのように行われるかに関しては、いまだ明らかにされていない。

また、文末詞「の」や「ん」は「のよ」、「のね」や「んか」、「んで」のように、他の文末詞と結合した形でも用いられるが、これらの複合形の獲得がどのように行われるかに関しても明らかにされていない。

これらの点について、本研究では野地（1973、1977）による縦断的発話資料を用いて明らかにする。本研究における研究課題は以下の2点である。

1) 広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座

2) 常磐大学人間科学部

- ①文末詞「の」と「ん」はどのように獲得されるか？
 ②文末詞「の」と「ん」の複合形はどのように獲得されるか？

なお、母語の獲得に際しては、周囲からの言語的インプットが重要な役割を果たすと思われる。そこで、本研究においては、周囲からの言語的インプットの実態についても明らかにし、それをふまえて、考察を行う。

2. 分析資料と分析対象

本研究で分析資料とする野地（1973, 1977）は1948年から1951年にかけて、広島県広島市において、自らの子ども（男児）の言語使用を記録したものであり、子どもによって産出された発話および父親や母親をはじめとする周囲から子どもに向けての発話が、その使用状況とともに記録されている。

大久保（1967）や小椋ほか（1997）において、幼児は3歳になるまでに多くの文末詞を獲得することが示されているが、本研究においてもこれらの研究をふまえ、上記の資料中に見られる3歳までの「の」と「ん」およびそれらの複合形の産出状況を分析する。

3. 「の」と「ん」の獲得

3.1 「の」と「ん」の初出の時期とその後の出現数

野地（1973, 1977）に見られる文末詞「の」と「ん」の初出の月齢とその後の産出状況をまとめたものが表1である。なお、それぞれの月齢に見られた文末詞「の」と「ん」の割合を（ ）内に示す。

表1 月齢別に見た文末詞「の」と「ん」の出現数

月齢	の	ん	合計
1.10	5 (100%)	0 (0%)	5 (100%)
1.11	1 (100%)	0 (0%)	1 (100%)
1.12	9 (100%)	0 (0%)	9 (100%)
2.1	11 (84.6%)	2 (15.4%)	13 (100%)
2.2	1 (6.7%)	14 (93.3%)	15 (100%)
2.3	14 (32.6%)	29 (67.4%)	43 (100%)
2.4	6 (15.4%)	33 (84.6%)	39 (100%)
2.5	15 (18.8%)	65 (81.3%)	80 (100.1%)
2.6	17 (13.3%)	111 (86.7%)	128 (100%)
2.7	10 (19.2%)	42 (80.8%)	52 (100%)
2.8	53 (64.6%)	29 (35.4%)	82 (100%)
2.9	28 (35.4%)	51 (64.6%)	79 (100%)
2.10	18 (16.8%)	89 (83.2%)	107 (100%)
2.11	4 (5.4%)	70 (94.6%)	74 (100%)
2.12	3 (10.3%)	26 (89.7%)	29 (100%)

表1から、共通語形の文末詞「の」の方が方言形の「ん」に先立って使用されていることが分かる。「の」の初出の時期に関して、本研究で分析した資料においては1歳10か月から使用が見られたが、大久保（1967）では1歳7か月、小椋ほか（1997）では1歳9か月にそれぞれ「の」が初めて使用されており、これらの先行研究とほぼ同様の結果であると言える。

一方、方言形の文末詞「ん」は2歳1か月に初めての使用が見られる。「の」と「ん」の使用割合を見ると、「ん」の使用が見られた2歳1か月時点では「の」の使用割合の方が高いが、2歳2か月以降、その割合は逆転しており、共通語形の「の」から方言形の「ん」への転換が急速に行われていることが分かる。

ここで、「の」と「ん」の周囲からのインプットについて見ると、資料中では1歳2か月の時点で幼児に対する「の」の使用が初めて見られる。一方、「ん」は2歳2か月以降に見られており、幼児の発話における初出の順序と対応する形になっている¹⁾。

ただし、その使用割合に関しては違いが見られ、2歳2か月から2歳12か月までに「の」が663回(97.1%)用いられているのに対して「ん」は20回(2.9%)用いられているのみである。この点で、先に見たような「の」<「ん」という幼児の使用割合の変化とは異なっている。すなわち、初出の順序に関しては周囲からのインプットと対応するが、使用割合に関しては対応しないということである。

3.2 文の種類から見た「の」と「ん」の獲得

「の」と「ん」の初出の時期と使用割合を先に見たが、両者にはどのような用法上の違いが見られるのであろうか。この点について、以下においては「の」と「ん」が付加された形で産出される「文の種類」という観点から分析を行う。

横山（1992, 1997）では、終助詞「よ」と「ね」の獲得に関して、発話の機能とともに分析が行われているが、本研究で用いた分析資料においては、文脈情報の不足から発話の機能が特定しにくいものが見られた。そこで本研究では、文の形および文末に付された「～？」といった記号から客観的に分析することが可能である平叙文と疑問文という「文の種類」に着目する。各月齢における「の」と「ん」について、平叙文と疑問文という観点から出現数をまとめたものが表2と表3である。

表2 月齢別に見た文末詞「の」の出現数<平叙文－疑問文>

月齢	平叙文	疑問文	合計
1.10	5 (100%)		5 (100%)
1.11	1 (100%)		1 (100%)
1.12	6 (66.7%)	3 (33.3%)	9 (100%)
2.1	6 (54.5%)	5 (45.5%)	11 (100%)
2.2		1 (100%)	1 (100%)
2.3	10 (71.4%)	4 (28.6%)	14 (100%)
2.4	1 (16.7%)	5 (83.3%)	6 (100%)
2.5	3 (20%)	12 (80%)	15 (100%)
2.6	8 (47.1%)	9 (52.9%)	17 (100%)
2.7	5 (50%)	5 (50%)	10 (100%)
2.8	21 (39.6%)	32 (60.4%)	53 (100%)
2.9	10 (35.7%)	18 (64.3%)	28 (100%)
2.10	3 (16.7%)	15 (83.3%)	18 (100%)
2.11	3 (75%)	1 (25%)	4 (100%)
2.12	2 (66.7%)	1 (33.3%)	3 (100%)

表3 月齢別に見た文末詞「ん」の出現数<平叙文－疑問文>

月齢	平叙文	疑問文	合計
1.10			
1.11			
1.12			
2.1		2 (100%)	2 (100%)
2.2	1 (7.1%)	13 (92.9%)	14 (100%)
2.3		29 (100%)	29 (100%)
2.4		33 (100%)	33 (100%)
2.5		65 (100%)	65 (100%)
2.6	1 (0.9%)	110 (99.1%)	111 (100%)
2.7		42 (100%)	42 (100%)
2.8		29 (100%)	29 (100%)
2.9	3 (5.9%)	48 (94.1%)	51 (100%)
2.10		89 (100%)	89 (100%)
2.11	2 (2.9%)	68 (97.1%)	70 (100%)
2.12		26 (100%)	26 (100%)

表2と表3を見ると、文末詞「の」と「ん」のいずれにおいても疑問文としての使用が多く見られるが、文末詞「ん」に関してはその傾向が顕著であり、「ん」が付加されるほぼすべての場合において、疑問文として用いられていることが分かる。表1で見たように、2歳2か月以降、「の」から「ん」への使用の転換が見られるが、そこではすべての用法が「ん」に転換しているというわけではなく、疑問文という特定の文の種類と結びついて使用されていることが分かる。

周囲からのインプットに関しても、「の」においては疑問文598回(90.2%)、平叙文65回(9.8%)であり、「ん」においても疑問文19回(95%)、平叙文1回(5%)と同様の傾向が見られる。

3.3 「の」と「ん」に前接する品詞－疑問文の場合－

上に述べたように、「ん」はいずれの月齢においても疑問文と結びついて使用されやすいが、表2を見ると、すべての疑問文が「ん」によって表されるわけではなく「の」によって表される場合もあることが分かる。では、ともに疑問文として用いられる場合、「の」と「ん」にはどのような違いが見られるのであろうか。以下においては、統語的特徴に着目し、疑問文として用いられる「の」と「ん」にどのような語が前接するかという観点から両者の違いを見る。

まず、疑問文として用いられた「の」と「ん」に前接する語を品詞別にまとめたものが表4と表5である。

表4 文末詞「の」が疑問文として用いられる場合に前接する品詞

月齢	動詞	形容詞	合計
1.12	3 (100%)		3 (100%)
2.1	2 (40%)	3 (60%)	5 (100%)
2.2	1 (100%)		1 (100%)
2.3	4 (100%)		4 (100%)
2.4	5 (100%)		5 (100%)
2.5	8 (66.7%)	4 (33.3%)	12 (100%)
2.6	8 (88.9%)	1 (11.1%)	9 (100%)
2.7	5 (100%)		5 (100%)
2.8	23 (71.9%)	9 (28.1%)	32 (100%)
2.9	14 (77.8%)	4 (22.2%)	18 (100%)
2.10	12 (80%)	3 (20%)	15 (100%)
2.11	1 (100%)		1 (100%)
2.12	1 (100%)		1 (100%)

表5 文末詞「ん」が疑問文として用いられる場合に前接する品詞

月齢	動詞	形容詞	合計
1.12			
2.1	2 (100%)		2 (100%)
2.2	13 (100%)		13 (100%)
2.3	29 (100%)		29 (100%)
2.4	33 (100%)		33 (100%)
2.5	65 (100%)		65 (100%)
2.6	108 (97.3%)	3 (2.7%)	111 (100%)
2.7	41 (97.6%)	1 (2.4%)	42 (100%)
2.8	28 (96.6%)	1 (3.4%)	29 (100%)
2.9	48 (100%)		48 (100%)
2.10	87 (97.8%)	2 (2.2%)	89 (100%)
2.11	64 (94.1%)	4 (5.9%)	68 (100%)
2.12	26 (100%)		26 (100%)

表4と表5から、「の」や「ん」が疑問文として用いられる場合には、いずれも動詞が前接することが多

いことが分かる。この点については、3.4節においてさらに分析を行う。

周囲からのインプットに関して、動詞 548 例 (91.6%)、形容詞 46 例 (7.7%)、名詞 4 例 (0.7%) が「の」に前接している。「ん」の場合には、前接する語のすべてが動詞であり、「の」や「ん」が幼児に対して用いられる場合にも、動詞が前接することが多いことが分かる。

表 4 と表 5 を見ると、「の」と「ん」のいずれの場合にも、形容詞も前接するが、その初出の時期は「の」(2歳1か月)の方が「ん」(2歳6か月)よりも早い。また、形容詞が前接する割合も異なり、「の」の方が形容詞が前接しやすいと言える。ここで、資料中に見られた文末詞「の」と「ん」に前接する形容詞をそれぞれまとめたものが表 6 である。() 内の数字は出現数を表す。

表 6 文末詞「の」と「ん」が疑問文として用いられる場合に前接する形容詞

月齢	の	ん
2.1	いたい (2), ない (1)	
2.2		
2.3		
2.4		
2.5	いい (3), おいしい (1), おおきい (1)	
2.6	いい (1)	いたい (2), ない (1)
2.7		くらい (1)
2.8	ない (3), ん ²⁾ (2), いい (2), さむい (2)	いたい (1)
2.9	いい (2), あったかい (2)	
2.10	ない (1), いたい (1), あおい (1)	ない (2)
2.11		はやい (3), ない (1)

表 6 から分かるように、「いたい」や「ない」など、「の」や「ん」に前接する形容詞には共通するものが多い。ただし、「いい」に関しては、2歳5か月から2歳9か月にかけて「の」に前接する継続的な使用が見られるものの、「ん」においては「いい」が前接する使用が見られない。ここから、形容詞の中には「の」や「ん」と結びつきやすい形容詞があることが示唆される。

周囲からのインプットにおいても、「ん」に形容詞が前接する例は見られず、「の」と形容詞との結びつきの強さが認められる。また、「の」に形容詞が前接する場合には「いい」が最も多く用いられており

(30.4%)、幼児の発話と同様の傾向が見られる。

3.4 「の」と「ん」に前接する動詞の形—疑問文の場合—

「の」と「ん」が疑問文として用いられる場合には動詞が前接することが多いことを表 4 と表 5 で見たが、その際の動詞の形についてまとめたものが表 7 と表 8 である。なお、表中の各項目について以下に例示する。
「辞書形 (現在)」…「行くの?」、「来るん?」
「辞書形 (過去)」…「くれたの?」、「吹いたん?」
「否定形 (現在)」…「行かないの?」、「出ないん?」
「補助動詞 (辞書形, 現在)」…「動いてるの?」、「取ってるん?」
「補助動詞 (辞書形, 過去)」…「作ってくれたん?」

表 7 文末詞「の」が疑問文として用いられる場合に前接する動詞の形

月齢	辞書形 (現在)	辞書形 (過去)	否定形 (現在)	補助動詞 (辞書形, 現在)	合計
1.12	3 (100%)				3 (100%)
2.1	1 (50%)	1 (50%)			2 (100%)
2.2	1 (100%)				1 (100%)
2.3	3 (75%)			1 (25%)	4 (100%)
2.4	3 (60%)		1 (20%)	1 (20%)	5 (100%)
2.5	7 (87.5%)			1 (12.5%)	8 (100%)
2.6	6 (75%)		1 (12.5%)	1 (12.5%)	8 (100%)
2.7	3 (60%)		2 (40%)		5 (100%)
2.8	9 (39.1%)	4 (17.4%)	4 (17.4%)	6 (26.1%)	23 (100%)
2.9	6 (42.9%)		7 (50%)	1 (7.1%)	14 (100%)
2.10	6 (50%)		5 (41.7%)	1 (8.3%)	12 (100%)
2.11			1 (100%)		1 (100%)
2.12			1 (100%)		1 (100%)

表 8 文末詞「ん」が疑問文として用いられる場合に前接する動詞の形

月齢	辞書形 (現在)	辞書形 (過去)	否定形 (現在)	補助動詞 (辞書形, 現在)	補助動詞 (辞書形, 過去)	合計
1.12						
2.1						
2.2	6 (46.2%)	6 (46.2%)		1 (7.7%)		13 (100.1%)
2.3	7 (24.1%)	20 (69%)		2 (6.9%)		29 (100%)
2.4	10 (30.3%)	16 (48.5%)		7 (21.2%)		33 (100%)
2.5	21 (32.3%)	30 (46.2%)	1 (1.5%)	12 (18.5%)	1 (1.5%)	65 (100%)
2.6	51 (47.2%)	37 (34.3%)		18 (16.7%)	2 (1.9%)	108 (100.1%)
2.7	17 (41.5%)	13 (31.7%)		8 (19.5%)	3 (7.3%)	41 (100%)
2.8	9 (32.1%)	11 (39.3%)		6 (21.4%)	2 (7.1%)	28 (99.9%)
2.9	22 (45.8%)	11 (22.9%)		10 (20.8%)	5 (10.4%)	48 (99.9%)
2.10	37 (42.5%)	27 (31%)	3 (3.4%)	15 (17.2%)	5 (5.7%)	87 (99.8%)
2.11	42 (65.6%)	15 (23.4%)		3 (4.7%)	4 (6.3%)	64 (100%)
2.12	19 (73.1%)	4 (15.4%)		3 (11.5%)		26 (100%)

表7と表8を見ると、「の」と「ん」に前接する動詞の形に関して、いずれも「行く」や「見る」などといった動詞の辞書形（現在）が前接することが多いという点では共通するが、それぞれ前接しやすい動詞の形があることが分かる。

まず、「の」に関しては、表7から分かるように「行かないの？」や「見ないの？」のように動詞の否定形が前接する例も見られるが、「ん」にはほとんど見られない。インプットに関しても、動詞の否定形が「ん」に前接する例は20例中1例のみであった。

一方、「ん」に関しては、表8から分かるように「吹いたん？」「買ったん？」のように動詞の辞書形（過去）が前接することが多いのに対して、「の」にそのような形で前接する例はほとんど見られない。また、「動いているの？」や「取ってるん？」のように、補助動詞（「ている」「てる」）が現在形で前接する例は「の」にも「ん」にも見られるが、「作ってくれたん？」のように補助動詞が過去形で前接するものは「の」には1例も見られない。

ただし、周囲からのインプットに関しては「の」に辞書形（過去）が前接する例は663例中271例（40.9%）と最も多い。補助動詞が過去形で「の」に前接するものも56例（8.4%）見られ、幼児の使用とは異なる傾向が見られる。

このように、「の」と「ん」が疑問文として用いられる場合、前接する動詞の形にはそれぞれ特徴が見られる。そして幼児の使用とインプットとの間には共通点と相違点が見られ、多くのインプットを受けているにもかかわらず、使用されていない形も見られる。

4. 「の」と「ん」の複合形の獲得

これまでは文末詞「の」と「ん」が単独で使用される場合について見てきたが、「の」と「ん」は「のね」や「んよ」のように、他の文末詞とともに複合形で用いられる場合もある。以下においてはそのような複合形の出現時期について、単独形と比較しながら1歳期、2歳前半期、2歳後半期に分けて見ていく。

まず、1歳期に見られた「の」と「ん」の単独形および複合形は以下のとおりである。なお、以下においては初出の形式に網掛けを付す。また、「の」およびその複合形を「の系」と呼び、「ん」およびその複合形を「ん系」と呼ぶ。

【1.10】

「の」系：①「の」5例（100%）

【1.11】

「の」系：①「の」1例（100%）

「ん」系：①「んよ」1例（100%）

【1.12】

「の」系：①「の」9例（100%）

「ん」系：①「んよ」4例（66.7%）、②「んね」2例（33.3%）

「の」系に関しては、先の表1で見たように、1歳10か月に単独形での使用が見られるが、1歳期においては複合形の使用は見られない。一方、「ん」系に関しては、1歳11か月に「んよ」という複合形が見られ、1歳12か月に同じく複合形の「んね」の使用が見られる。先の表1では単独形「ん」が2歳1か月に初めて用いられていることを見たが、「ん」系に関しては単独形よりも複合形の使用が先に見られるという特徴がある。

ここで周囲からのインプットにおける「の」系と「ん」系を単独形と複合形という観点から見ると、「の」系に関しては「の」という単独形が1歳2か月に見られた後、「のね」（1歳4か月）、「のよ」（1歳5か月）、「のかね」（1歳11か月）という複合形が見られる。一方、「ん」系に関しては、1歳10か月に「んよ」と「んね」という複合形が見られるが、単独形は見られない。

次に、2歳前半期における単独形と複合形の出現時期を見る。2歳1か月から2歳6か月までに見られた「の」と「ん」の単独形と複合形を以下にまとめる。

【2.1】

「の」系：①「の」11例（100%）

「ん」系：①「んよ」2例（50%）、①「ん」2例（50%）

【2.2】

「の」系：①「の」1例（100%）

「ん」系：①「んよ」26例（60.5%）、②「ん」14例（32.6%）、

③「んね」3例（7%）

【2.3】

「の」系：①「の」14例（93.3%）、②「のよ」1例（6.7%）

「ん」系：①「んよ」57例（50%）、②「ん」29例（25.4%）、

③「んど」16例（14%）、④「んで」5例（4.4%）、

⑤「んね」3例（2.6%）、⑥「んと」2例（1.8%）、

⑥「んよね」2例（1.8%）

【2.4】

「の」系：①「の」6例（66.7%）、②「のよ」1例（11.1%）、

②「のね」1例（11.1%）、②「のんよ」1例（11.1%）

「ん」系:①「んよ」48例(47.5%),②「ん」33例(32.7%),
③「んね」11例(10.9%),④「んで」5例(5%),
⑤「んと」3例(3%),⑥「んよね」1例(1%)

【2.5】

「の」系:①「の」15例(75%),②「のよ」3例(15%),
③「のんよ」2例(10%)
「ん」系:①「ん」65例(67.7%),②「んよ」21例(21.9%),
③「んね」8例(8.3%),④「んか」2例(2.1%)

【2.6】

「の」系:①「のよ」20例(52.6%),②「の」17例(44.7%),
③「のんよ」1例(2.6%)
「ん」系:①「ん」111例(73.5%),②「んよ」31例
(20.5%),③「んね」7例(4.6%),④「んで」1例(0.7%),
④「んど」1例(0.7%)

「の」系に関しては、2歳3か月に「のよ」、2歳4か月に「のね」、「のんよ」という複合形が見られる。一方、「んよ」、「んね」という複合形が1歳期に見られた「ん」系に関しては、2歳1か月に単独形の「ん」が使用されており、「の」系と「ん」系では逆の傾向が見られる。

また、「の」と結合して用いられる「よ」や「ね」は、いずれもそれ以前に「ん」と結合して用いられており、複合形の使用に関しては「ん」系から「の」系へという使用傾向が認められる。

周囲からのインプットに関して、「の」系では「のと」(2歳4か月)という新たな複合形が見られている。「ん」系でも「んぞ」(2歳1か月)、「んかね」(2歳3か月)という新たな複合形が見られるとともに「ん」という単独形が2歳3か月に見られる。幼児の発話において、「の」系は「単独形→複合形」、「ん」系は「複合形→単独形」という方向性があることを先に見たが、周囲からのインプットにおいても同様の方向性が認められる。

最後に、2歳後半期における単独形と複合形の出現時期を見る。2歳7か月から2歳12か月までに見られた「の」と「ん」の単独形と複合形を以下にまとめる。

【2.7】

「の」系:①「の」10例(58.8%),②「のよ」7例(41.2%)
「ん」系:①「ん」42例(45.7%),②「んよ」39例(42.4%),
③「んね」4例(4.3%),④「んか」2例(2.2%),④「んと」2例(2.2%),⑤「んで」1例(1.1%),⑤「んど」1例(1.1%),⑤「んぜ」1例(1.1%)

【2.8】

「の」系:①「の」53例(86.9%),②「のよ」8例(13.1%)
「ん」系:①「ん」29例(42%),②「んよ」24例(34.8%),
③「んぜ」5例(7.2%),④「んか」3例(4.3%),④「んで」3例(4.3%),⑤「んぞ」2例(2.9%),⑥「んよね」1例(1.4%),⑥「んね」1例(1.4%),⑥「んと」1例(1.4%)

【2.9】

「の」系:①「の」28例(75.7%),②「のよ」7例(18.9%),
③「のね」2例(5.4%)
「ん」系:①「んよ」78例(59.1%),②「ん」51例(38.6%),
③「んね」1例(0.8%),③「んで」1例(0.8%),③「んど」1例(0.8%)

【2.10】

「の」系:①「の」18例(62.1%),②「のよ」8例(27.6%),
③「のんよ」1例(3.4%),③「のんで」1例(3.4%),
③「のんぜ」1例(3.4%)
「ん」系:①「ん」89例(47.8%),②「んよ」64例(34.4%),
③「んぜ」11例(5.9%),④「んで」9例(4.8%),
⑤「んか」5例(2.7%),⑥「んよね」4例(2.2%),
⑦「んね」3例(1.6%),⑧「んぞ」1例(0.5%)

【2.11】

「の」系:①「のよ」7例(53.8%),②「の」4例(30.8%),
③「のんよ」1例(7.7%),③「のと」1例(7.7%)
「ん」系:①「んよ」87例(51.5%),②「ん」70例(41.4%),
③「んぜ」5例(3%),④「んか」4例(2.4%),⑤
「んで」3例(1.8%)

【2.12】

「の」系:①「のよ」3例(42.9%),①「の」3例(42.9%),
②「のんよ」1例(14.3%)
「ん」系:①「んよ」65例(59.1%),②「ん」26例(23.6%),
③「んで」15例(13.6%),④「んか」3例(2.7%),
⑤「んよね」1例(0.9%)

「の」系に関しては、2歳10か月に「のんで」、「のんぜ」、2歳11か月に「のと」という新たな複合形がそれぞれ見られる。これらの複合形を構成する「で」「ぜ」「と」は、いずれもこれ以前に「ん」と結合して用いられており、先に述べた「ん」系から「の」系へという複合形の使用傾向がここでも確認される。一方、「ん」系に関しては、2歳7か月に「んぜ」、2歳8か月に「んぞ」という複合形がそれぞれ見られる。これ以降、新たな複合形は見られず、この頃までに「の」

系の複合形の獲得は概ね行われていると考えられる。

周囲からのインプットにおいては「の」系で「のよね」(2歳7か月)、「ん」系で「んと」(2歳8か月)、「んで」(2歳12か月)という新たな複合形がそれぞれ見られる。

以上、本節においては文末詞「の」と「ん」の単独形と複合形の獲得について見てきたが、ここから次のような傾向が指摘できる。

まず、「の」系は単独形の「の」が産出された後に「のよ」や「のね」などといった複合形の「の」系文末詞が産出される。これに対して、「ん」系は「んよ」や「んね」といった複合形の「ん」系文末詞が産出された後に単独形の「ん」が産出される。このような単独形と複合形の出現順序に関しては、周囲からのインプットにも同様の方向性が見られる。

また、「の」が複合形として用いられる場合、「の」と結合して用いられる文末詞はいずれもそれ以前に「ん」と結合して複合形として用いられているものであり、複合形に関しては「ん」系から「の」系へという使用傾向が認められる。

5. まとめ

本研究では、①文末詞「の」と「ん」はどのように獲得されるか、②文末詞「の」と「ん」の複合形はどのように獲得されるか、という二つの研究課題について、野地(1973, 1977)による縦断的発話資料を用いて分析を行った。本研究で明らかになったことを以下にまとめる。

①文末詞「の」と「ん」はどのように獲得されるか？

- 文末詞「の」と「ん」が単独で用いられる場合、「の」の使用が見られた後に「ん」の使用が見られる。
- 「ん」の使用が見られた後は「ん」の使用割合が急増するが、そこでの用法には偏りが見られ、3歳までに見られる「ん」の大部分は疑問文として用いられている。
- 「の」と「ん」が疑問文として用いられる場合、動詞の辞書形(現在)が前接しやすいという点は共通するが、「の」には動詞の否定形(現在)、「ん」には動詞の辞書形(過去)や補助動詞(辞書形, 過去)が前接しやすいという個別の特徴も見られる。
- 「の」と「ん」が単独で用いられる場合に「の」の方が先に見られる点、「ん」の大部分が疑問文として用いられる点は周囲からのインプットにも同様の傾向が見られる。一方、前接する動詞の形式に関しては共通点と相違点が見られ、多くのインプットを受けているにもかかわらず、使用されていない形も

見られる。

②文末詞「の」と「ん」の複合形はどのように獲得されるか？

- 「の」系では単独形の「の」が産出された後に「のよ」や「のね」などといった複合形の「の」系文末詞が産出される。これに対して、「ん」系では「んよ」や「んね」といった複合形の「ん」系文末詞が産出された後に単独形の「ん」が産出される。
- 「の」系の場合、「の」と結合して用いられる文末詞はいずれもそれ以前に「ん」と結合して複合形として用いられているものである。
- 周囲からのインプットにおいても、「の」系では「単独形→複合形」、「ん」系では「複合形→単独形」という方向性が認められる。

以上のように、単独形では共通語形の「の」が早く見られる。それに対して、複合形に関しては、出現時期に関しても結合する文末詞に関しても「ん」系の方が「の」系よりも早いという傾向が認められる。このような特徴は周囲からのインプット発話にも見られ、「の」や「ん」の獲得が周囲からのインプットの影響を受けて進むことが示唆された。

その一方で、周囲からのインプットの数は「の」の方が多いのに対して幼児の発話には「ん」の方が多く見られるのは何故かという疑問やインプットを受けているにもかかわらず使用されない形があるのは何故かという疑問も残った。

また、本研究では、「の」と「ん」に着目して、共通語形と方言形の獲得の過程を明らかにしたが、他の語においても同様の傾向が見られるのか、他の方言においてはどうかなど、検討すべき課題も残されている。いずれも今後の課題としたい。

【注】

- 1) 資料中には見られないが、これ以前にもそれぞれの形式が用いられており、幼児へのインプットとして働いていたと考えられる。ただし、資料中での出現時期の違いをふまえると、「ん」よりも「の」の方が、早くからインプットとして多く用いられていたと推測される。
- 2) ここでの「ん」は共通語における「ない」の方言形である。

参考文献

- 大久保愛 (1967) 『幼児言語の発達』東京堂出版.
- 小椋たみ子・中則夫・山下由紀恵・村瀬俊樹・マユール
あき (1997) 「日本語獲得児の語彙と文法の発達：
Clan プログラムによる分析」『神戸大学発達科学部
研究紀要』4(2), pp.31-57, 神戸大学発達科学部.
- 野地潤家 (1973) 『幼児期の言語生活の実態 1』文化
評論出版.
- 野地潤家 (1977) 『幼児期の言語生活の実態 2』文化
評論出版.
- 藤友雄暉 (1979) 「幼児の助詞の習得に関する発達の
研究」『教育心理学研究』27(1), pp.11-17, 日本教
育心理学会.
- 藤原与一 (1982) 『昭和日本語方言の総合的研究 第
三巻 方言文末詞<文末助詞>の研究(上)』春陽堂.
- 横山正幸 (1992) 「幼児による終助詞ネの獲得－R 児
の場合－」『福岡教育大学紀要 第4分冊 教職科
編』(41), pp.351-357, 福岡教育大学.
- 横山正幸 (1997) 「幼児による終助詞ヨの獲得－R 児
の場合－」『福岡教育大学紀要 第4分冊 教職科
編』(46), pp.253-259, 福岡教育大学.